

第16回

## ベトナム戦争と世界秩序の変容

監修・講師 角田展子

### 学習のねらい

東西冷戦下におきたベトナム戦争とはどのような戦争だったのか。その原因や経過を理解したうえで、この戦争が世界に与えた影響について考えよう。国際関係が、米ソ対立の構図から多極化へと変容したこと、また、ベトナム反戦運動が全世界的に広がり、さまざまな「異議申し立て」の社会運動の高揚に結びついたのはなぜなのかを考察しよう。



#### ●ベトナム戦争

ベトナム戦争／パリ和平協定／中ソ対立／米中和解／多極化

#### ●広がる社会運動

エコロジー／フェミニズム／公民権運動／ベトナム反戦運動／公害反対運動

#### ●地域連携の拡大

地域統合／ヨーロッパ共同体（EC）／東南アジア諸国連合（ASEAN）

### ベトナム戦争

ベトナム戦争は、戦後世界秩序に大きな影響を与えた戦争であった。長期にわたる戦争の結果、アメリカ合衆国は経済的にも疲弊し、国際的な批判を浴びた。そのうえ、最終的にベトナムから撤退したことで、「アメリカの覇権」の動揺が如実になった。

同時期、社会主義陣営でも中国とソ連の対立（中ソ対立）が激化し、武力衝突（中ソ国境紛争）にまで発展していた。また、中国国内では文化大革命によって社会、経済の大混乱がおきていた。ソ連は、チェコスロバキアでの民主化の動き（「プラハの春」）を鎮圧するなど、社会主義陣営も一枚岩ではないことが明らかになった。

アメリカはベトナム和平をめざすなかで、長年対立していた中国と接近をはかり、1972年には米中和解が実現した。日本も、中国との国交を正常化した。

このように、ベトナム戦争をさかいに、世界は米ソ2極対立だった時代から、多極化の時代に変容していった。

### 広がる社会運動

ベトナム戦争は、メディアを通して戦争の実情を知った人々を中心に、全世界的な反戦運動が広がった戦争でもあった。日本でも、さまざまな形で反戦運動が展開された。

また、アメリカでは、南部で続いていた人種隔離政策への反対運動が、黒人の市民的権利を求める公民権運動に発展し、ベトナム反戦運動とも結びついて大きく高揚した。

ベトナム戦争がおきていた1960年代末は、ちょうど、経済成長を達成した先進諸国では「それで本当に豊かになったのか」「豊かさとは何か」を問いなおす動きがでてきた時代でもあった。例えば、環境問題を重視するエコロジーや、性別役割分担を問いなおすフェミニズムなどの考え方も社会に広がっていった。また、パリの「五月革命」に象徴されるように、先進諸国の学生は、既存の社会秩序や権威に対する「異議申し立て」を行った。日本でも大学紛争や公害反対運動などの社会運動が活発化した。

これらの社会運動は、国境を越えて相互に共鳴しあい、「近代」を問い直す大きな思潮となった。

### 地域連携の拡大

第二次世界大戦後、西ヨーロッパ諸国では域内の統合をめざす動きが進んだ。当初、フランス、西ドイツ、イタリア、ベネルクス3国（ベルギー・オランダ・ルクセンブルク）の計6か国によるヨーロッパ石炭鉄鋼共同体（ECSC）から始まったこの動きは、市場統合の拡大をめざして、1967年にはヨーロッパ共同体（EC）となり、主権国家の枠組みをこえた経済・政治の統合がめざされた。その後、加盟国も増加し、1993年にはヨーロッパ連合（EU）へ発展した。

東南アジアでも、域内の連携をめざし、1967年インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、タイの5か国によって東南アジア諸国連合（ASEAN）が結成された。ASEANもその後、加盟国が増加し、現在では地域協力の基盤となっている。ASEANは経済連携に重点を置いた組織で、国家を超えた政治統合はめざしていないところがEUとの相違点である。

#### “探究”してみよう！

- ベトナム戦争がアメリカに与えた影響、ベトナムに与えた影響を考えてみよう。
- 1960年、70年代の社会運動の成果にはどのようなものがあるだろうか。調べてみよう。
- EUとASEANを比較してみよう。共通点は何だろうか。また、相違点に注目して、なぜ、違いが生じたのか考えてみよう。
- EU、ASEAN以外にも国際的な地域統合があるだろうか。それらを調べ、EU、ASEANと比較しよう。

#### 〈参考〉

- 開高健『ベトナム戦記』（朝日文庫 1990）  
1964～65年にかけて実際に当時の南ベトナムに赴いた日本人の作家によるルポ。ジャングルでの銃撃戦に巻き込まれた顛末は、戦場のリアルを描いていて秀逸。初版は1965年。
- ジェームス・M・バーダマン『黒人差別とアメリカ公民権運動 一名もなき人々の戦いの記録』（集英社新書 2007）